

最優秀

## 障がい者の生きがいは。

相模原中等教育学校

3年

荒俣あらまた

侑来ゆうら

私には視覚障がいを持つ祖父がいます。祖父は生まれつき網膜色素変性症を患っていて、四十三歳の時に全盲になりました。網膜色素変性症は現代の医学ではまだ治療法のない難病です。祖父は私が生まれてから一度も私の顔を見たことがありません。そんな祖父ですが、いわゆる障がい者の概念をくつがえすような人物です。祖父は人と話すことが大好きで、知識や話題も豊富で、会話をしているとても楽しいです。また、六十歳を過ぎてからマラソンをはじめ、東京マラソンに挑戦したり、地域の障がい者の会の代表を務め、行政との橋渡しをしたりもしています。さらに、「いのちの電話」で多くの人の悩みを聞くボランティアも行っています。私たち家族も祖父といると視覚障がい者であることを忘れてしまうほど、エネルギーに満ちていて明るい人です。

私は身近に障がい者がいることが、彼らの日々の生活や思いを知る良い機会であると考え、改めて祖父から話を聞いてみました。それにより、私は世間の障がい者に対する「ハンディキャップがあつてかわいそう」などというイメージとは違う障がい者の姿に気づきました。そして、彼らがよりよく生きられる社会とはどのようなものか改めて考えてみました。

祖父のような障がい者は一人では出かけられないなど、日常生活に不便を強いられることが多くあります。しかし、祖父によるとハード面では多くのことが改善されてきているそうです。例えば、

視覚障がい者用の音声ソフトをパソコンに入れることで、インターネット上の情報にアクセスしたり、メールのやりとりをしたりできるなど、様々なツールが開発され、また、ヘルパーさんのサポートや福祉タクシーを利用して様々な場所へ出かけることができるなど、利用できる制度も増えてきているそうです。ソフト面でも前向きな変化がたくさんあり、最近では街の中でも困っていると声をかけて助けてくれたり、電車で席を譲ってくれたり、障がい者をサポートしてくれる人が増えているそうです。昔と比べると障がい者を取りまく環境は格段に良くなっていて、体に不自由はあっても、よりよい日常生活が送れるようになってきているそうです。

その一方で、障がい者自身がこういったツールや制度を活用するために、自ら情報を集め、申請をしなくてはならないという現実があります。受け身で待っているだけでは必要な情報を教えてもらえないという問題は残っています。制度はあってもそれを知らずに使えていない人もまだまだたくさんいるのです。祖父は自分もそういった人たちと行政との橋渡しができたらと思っているようです。実際に、祖父にパソコンを教えてくれたのも同じ視覚障がいを持つ若者だったので、障がい者同士のネットワークがいかに大切かが分かります。また、目が悪い自分でも悩んでいる人のつらい気持ちを聞くことならできるからと長年続けている電話相談のボランティアも、祖父のライフワークになっていっています。

こうして生き生きと日々を過ごす祖父の姿を見てみると、障がい者はただ助けてもらわなければいけない人たちなのではないというように感じます。障がい者であっても健康者と同じように社会生活において居場所があり、存在意義を感じられること、社会にどう貢献していけるかを考えられることが彼らの望む生き方なのではないか、と思います。障がい者であっても、ハンディキャップがあることからたらされる生活の困難というものがあっても程度は軽減され、

日常生活が送れるようになった上で、自分の日常を楽しみ、さらに誰かの役に立ちたいと考えられること。これが最終的に彼らが求めている生き方なのではないでしょうか。そしてさらに考えてみると、こういったことを自分の生きる意味であると考えられることは、障がい者でも健常者でも同じです。障がい者は、私たちよりも生活に不自由なことはありますが、生きていくなかで一人として求めるものは同じなのです。それぞれの障がいに合わせて適切なサポートが受けられるようにし、その上で彼らにもそれぞれの形で貢献してもらうことのできる社会が私たちがこれから目指すべき社会のありかたなのではないでしょうか。社会生活のなかで、自分の存在意義を見出すこと、誰かの役に立つことは誰にとっても難しいことです。それでも障がいのあるなしに関わらず、多様性を認め、みんなが生きる意味を感じられることが幸せなことであると思います。障がい者にとってよりよく生きるとは何かを考えてきましたが、それは人がよりよく生きるとは何かという問いと同じなのではないでしょうか。障がい者がよりよく生きられる社会とは、かかえている日常生活の不自由さが取り除かれたうえで、さらに自分らしく生きることができるような社会なのです。

